

多文化主義が人々を分かつとき

—日系カナダ人研究が示す多文化主義政策への両義的態度とその背景—

概要

京都大学人文科学研究所 ライル・デ・スーザ (Lyle De Souza) 日本学術振興会 (JSPS) 海外特別研究員は、第二次世界大戦中に強制収容に苦しんだ日系カナダ人が、多文化主義に対して両義的な姿勢を取っていることを明らかにしました。

日系カナダ人は「模範的マイノリティ」とされています。そのためこれまでは、マイノリティに「良い」ものとイメージされるカナダの多文化主義と、その理念にかなう日系カナダ人とは、相補的な関係にあると想定されてきました。これに対して、本研究では、日系カナダ人自身が紡ぎだす声と文化アイデンティティを明らかにすることで、こうした想定が安易なものであることを示しました。具体的には、日系カナダ人映画製作者によるドキュメンタリー映画と、制作者に対するインタビューの分析を通して、移民初期の人種差別と第二次世界大戦中の強制収容経験による傷跡が、日系カナダ人に多文化主義政策への警戒心を抱かせていることを明らかにしたのです。

このことは、政府が多文化主義政策を立てる場合には、移民のアイデンティティと声、過去の政治的・社会的な条件、そして現在の政治・経済を考慮に入れることの重要性を示しています。マイノリティのコミュニティ内部にある多様性と需要に注意を払うことで、国家を中心に置いた多文化主義政策ではなく、現実に見合った政策を立てることができると考えられます。そしてそれは、本研究が行っているように、コミュニティのリーダーや文化生産者個々人の声を聴くことを通して達成できることなのです。

本研究は、2018年7月31日に国際学術誌「OMNES:The Journal of Multicultural Society」の第9巻1号に掲載されました。



1. 背景

本研究は、デ・スーザ博士による、現代カナダ多文化主義における日系カナダ人の文化アイデンティティに関する研究に基礎を置いています。カナダ多文化主義を検討する先行研究は多く、カナダ多文化主義への賛否、あるいはそれに関する理論や歴史を考察するものに分かれます。しかし、日系カナダ人に焦点を当てたカナダ多文化主義研究は手薄な状況でした。そこで、デ・スーザ博士は、日系カナダ人についてより詳細に研究するべく、彼らの多くが多文化主義に対して、肯定と否定の両義的な態度をもっていることを示唆する調査を行いました。

多文化主義に関する政治言説において、マイノリティの声は、政府・報道・学界そして社会のより大きな声にかき消されてしまうことがほとんどです。そのため、日系カナダ人が多文化主義に恩恵を受け、したがってそれに対して肯定的であるだろうといった想定がなされるのは（かれらが模範的マイノリティとみなされていることも手伝って）容易に考えられることなのです。

また、これまでは日系カナダ人自身の声が調査対象になることは少なく、カナダ多文化主義の効果を論じるうえで、いわばパズルの欠けたピースとなっていました。そこで、本研究では、そうした声をできるだけ多く集め、日系カナダ人のカナダ多文化主義に対する両義的な態度の背景を明らかにすることを目指しました。

2. 研究方法・成果

なぜ日系カナダ人がカナダ多文化主義に対して両義的な見解をもっているのか、という問いに答えるための調査方法として以下のような複合的な手法を用いました。日系カナダ人映画製作者によるドキュメンタリー映画の分析と、その製作者へのインタビューを実施し、そこで得たデータを2013年の5か月間のフィールドワーク中に行った、日系カナダ人コミュニティでの参与観察の記録と照らし合わせたのです。

日系カナダ人の歴史に関係する様々な視点から多文化主義について検討することで、いかに権力構造があらゆる方向からこのマイノリティ集団に影響を与えているかを理解することができます。

加えて、ジェフ・チバ・スターズ (Jeff Chiba Stearns) 氏とカレン・スズキ (Karen Suzuki) 氏にインタビューを行いました。両氏を選んだのは、彼らが今日もっとも著名な日系カナダ人であり、両氏ともその作品のなかで多文化主義を直接取り扱っているからです。両氏へのインタビューを日系カナダ人コミュニティでの参与観察と会話によって補足することで、文化生産者（映画製作者）たちの述べる内容が、他の日系カナダ人の見解を偏りなく反映しているものかどうかを確かめることができました。

本研究は、歴史的な傷跡がいかに日系カナダ人に対する多文化主義の効果を屈折させているか、ということを示しました。今でこそ彼らは白人マジョリティから模範的マイノリティとみなされているかもしれませんが、カナダにおける人種差別や「黄禍」(Yellow Peril: 19~20世紀に欧米豪などの白人の間に現れた黄色人種脅威論)というレッテル貼りに苦しんだ歴史が、政府・メディアそして社会が生み出す彼らの表象に対して警戒感を抱かせているのです。

たとえば「食 (food)・祭り (festival)・ファッション (fashion) の3F」と揶揄されるように、多文化主義は表面的にしか行われていないと主張する人々もいますが、カナダで生まれ育った若い世代の日系カナダ人たちは、一般的には多文化主義を支持しています。ただそれでもなお、初期の人種差別と第二次世界大戦中の強制収容経験による傷跡は残っています。本研究は、この歴史的な傷跡が、いかに日系カナダ人に対する多文化主義の効果を屈折させているかを示しているのです。

本研究は、カナダ政府が多文化主義政策を立案するにあたって、移民のアイデンティティと声、過去の政治的・社会的な条件、そして現在の政治と経済を考慮に入れることの重要性を示しています。また、多文化主義

政策はマイノリティに対してつねに直接的な効果をもたらすとは限らず、マイノリティごとに異なる歴史と社会条件に媒介されうることも、本研究で明らかになりました。

どのような多文化主義政策を実行する場合でも、多様性に対応しようとするならば、まずマイノリティの中に存在する多様性を認識する必要があります。すべてのマイノリティ集団は同じではありません。それぞれ異なる起源・歴史・慣習・伝統によって規定される彼らは、他のマイノリティも含めた別のカナダ人に対して、それぞれ異なる仕方で社会的に応答するのです。さらに、マイノリティの特徴に応じて、彼らの文化的表現もそれぞれに異なってきます。したがって、多文化主義政策を行う政府は、政策の効果は、異なるマイノリティ集団に対して、さらにはそれらの集団内の異なる人々に対して、政策の効果が異なってくることを認識すべきなのです。

3. 波及効果、今後の予定

日本は将来、人口減少を緩和するためにより多くの移民を受け入れなければならないかもしれません。そのような課題を抱える日本を含めて、本研究はどの国々にとっても意義のあるものです。日本は、多文化主義の政策と研究において主導的な役割を果たしてきたカナダの経験から、多くを学ぶことができます。現時点では、日本における議論は、移民をより多く受け入れるべきかどうかに関心をおいています。しかし、日本にはすでに多くの多様なマイノリティがいます。彼らを『非日本人』とひとくくりにするのではなく、各々のマイノリティが日本にもたらす多様性と豊かさを後押ししていかなければならないでしょう。

4. 研究プロジェクトについて

本プロジェクトは JSPS の科研費番号 16F16751 から助成を受けており、京都大学人文科学研究科と関連しています。

<論文タイトルと著者>

タイトル：The Ambivalent Model Minority: Japanese-Canadians and Canadian Multiculturalism (両義的な模範的マイノリティ：日系カナダ人とカナダ多文化主義)

著者：Lyle De Souza

掲載誌：OMNES: The Journal of Multicultural Society

<お問い合わせ先>

Lyle De Souza (ライル・デ・スーザ)

京都大学人文科学研究所・日本学術振興会海外特別研究員 (JSPS Postdoctoral Fellow)

E-mail : lyle@lyledesouza.com Twitter : @lds777